

『赤い鳥』系の文芸主義と拮抗し、生活綴方系の源流誌として最も読まれた幻の児童学習雑誌が八十年の歳月を越えて甦る

監修 中内敏夫 (一橋大学名誉教授)

全16巻・別巻1

全巻完結!!

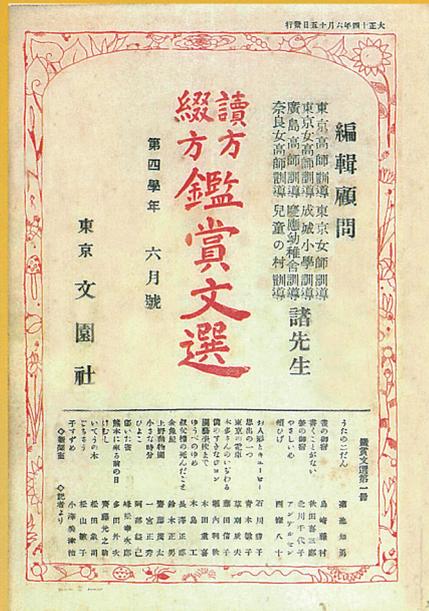


昭和五年九月号

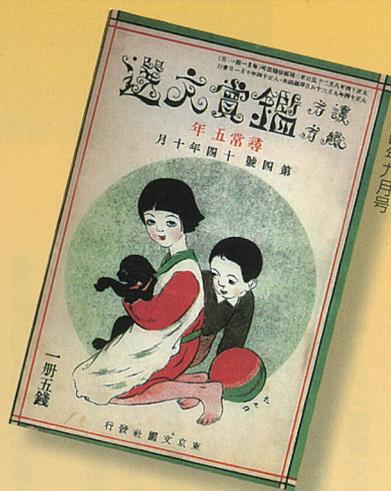


昭和八年一〇月号

復刻
綴方鑑賞文選
本



大正一四年六月(創刊)号



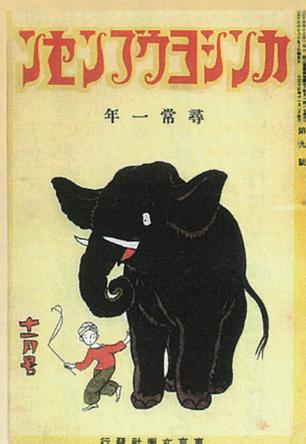
大正一四年九月号



昭和二年一月号



昭和三年三月号



大正一五年一月号

本誌に収められている1920~30年代の全国の子どもの作文、詩、そして有名、無名の教師たちの評文、新童話、評論類は、本誌の主宰者たちの思想的立場を反映して、同時代の地方社会を生きる子ども、教師、親たちの生き様を、素朴なことばで、ありのままに伝えている。本誌は、そういう意味で明治国家の集権的な文明化政策の後をうけて、日本で「社会」らしいものが漸く自立への道を自らの深部において歩み始める時代の社会史、子ども史、家族史、そして教育史にとっての根本資料である。また、同時代の児童雑誌『赤い鳥』休刊中も(本誌が)続刊されていた点を考えると、児童文学史の欠落を埋める史料の意味合いをもつ。その復刻が永く待ち望まれてきたゆえんである。

作文・綴方教育史・ 児童文学史の欠落 部分を補う幻の 雑誌の復刻

日本人の 忘れられた記憶、 ぬり込められた 体験の数々を 端ばしに秘める

まさに壮大な作文・ 綴方教育のパノラマ



本誌の特色と刊行の意義

●「赤い鳥」の文芸主義に對峙した生活綴方雑誌「鑑賞文選」「綴方讀本」は、大正末期から昭和初期にかけて全国・植民地の児童に最も愛されて、最も読まれた日本で最初の学別学習雑誌である。

●本書は現存が確認できた原本（大正一四年六月号〈創刊号〉から昭和一〇年五月号まで）全五六八冊を収めた。

●本書は一頁に原本四頁を収録し、価格を出来る限り抑えるようにした。

●巻頭の口絵に各巻の原色の表紙を一括して収録し、原本の形姿を出来る限り再現した。

●本誌における児童投稿入選作品の総数は、一九二五（大正一四）年六月創刊から原本が現存する一九三五（昭和一〇）年五月迄で約二万一千点。地域は国内では北は北海道から南は九州・沖縄まで、植民地は樺太、台湾、朝鮮、満州に及ぶ広い地域に読者・投稿者がいた。入選作品の多い道府県は、①東京八五四点、②埼玉五六三点、③北海道五八四点、④茨城五五七点、⑤三重五三〇点、⑥山梨四八〇点、⑦青森四一〇点、⑧静岡四〇六点、⑨高知三二二点、⑩新潟三四〇点等である。

●本誌を支えた主な編集者・編集顧問・同人等の文章収録数（童話・童謡・詩・文の研究・作品評等）は、①小砂丘忠義三四〇点、②志垣寛一一五点、③野村芳兵衛一〇五点、④峰地光重一〇〇点、⑤小林かねよ八二点、⑥上田庄三郎三〇点、⑦門脇英鎮一八五点、⑧今井誉次郎五六点、⑨菊池知勇三五点、⑩千葉春雄三二点、⑪村山俊太郎一三〇点、⑫園分一太郎一五五点等である。

●本誌には著名な童話・童謡作家等の作品を多く掲載しており、当時、児童がどのような文学作品にふれていたかがわかる貴重な資料である。収録作品の多い作家を挙げると、①浜田広介五七点、②北原白秋三五点、③山村暮鳥三四点、④島崎藤村三三點、⑤西条八十 二九点、⑥小川未明二四点、⑦野口雨情一八点、⑧鈴木三重吉一五点、⑨千家元磨一三点、⑩吉田絃二郎一一点、⑪島木赤彦一〇点等で他に武者小路実篤、夏目漱石、国木田独步、芥川龍之介、菊池寛、千葉省三、坪内逍遙、北川千代子等多数の作家の作品を掲載している。

●別巻には次の項目を収めた。

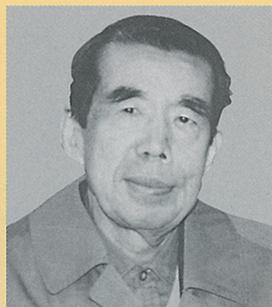
①本誌刊行の意義を深く理解していただくために「監修のことば」「解説」「総目次」等を付した。

②「児童作品道府県植民地別目録」を作成し、各地域毎の作品、各地域内の綴方教育の盛んな学校が一括してわかるようにした。

③「編集者・編集顧問著作目録」「全国の同人・教師等著作目録」を作成し、綴方教育者・運動家の個別研究の便宜を図った。

④「作家別作品目録」「外国作品目録」を作成し、どの作家のどの作品が児童に読まれていたかがよくわかるようにした。

⑤付録として、1「鑑賞文選・綴方讀本」関係年表、2「鑑賞文選・綴方讀本」を支えた主な人々、3「鑑賞文選・綴方讀本」収録作家紹介を収録した。



監修のごとば(抜粋)

中内敏夫(一橋大学名誉教授)

■『鑑賞文選』と『綴方讀本』は、一九二〇年代から三〇年代にわたって数多く刊行された児童・少年少女期の子ども向け雑誌の一つで、すでに復刻済みの教師・親向け雑誌『綴方生活』と互いに支えあう関係にあった。その主な内容は、産業革命につぐ産児制限国禁下の第一次人口革命を経て、新しい段階に入る時期の日本の地方・底辺社会を生きた子どもと教師たちの日々の生き方を生々しく伝える生活記録集である。その続刊の歴史は、ネオ・ロマン派を代表する前期「赤い鳥」系の自由教育・童心主義児童文化の子ども像と拮抗しながら、後年、生活綴方と呼ばれるようになる児童文化の子ども像が、つむぎだされてくる社会過程である。収録作品には、選者の評と作者児童の出身道府県名と校名が植民地のものも含めて全部入っている。そこに、生活綴方指導の実践とその成果が、どのような指導目標と地域的背景のなかで実ったものであったかの一端を知る事ができる。同時代についての文部省と学校側の意図を伝える史料は少なくない。しかし、これを、全国的規模で、子ども側の側から、長期的かつ継続的に伝える史料は他にない。

■『鑑賞文選』は、一九二五(大正一四)年六月、平凡社社主・下中弥三郎が、もともと、旧友の老後を養う目的で文園社刊として発行しはじめた学年別八冊の子ども向け雑誌であった。全国の子どもから自作の作文、詩、俳句、短歌などを投稿として受け付け、これに選評を付し、さらに競合誌『赤い鳥』には姿をみせること少なかつた自然主義やリアリズム系のものも含む多くの作家の童話、童謡、童詩、文話、論評などを加えて冊子とし、市販するものであった。選評は、下中が関係していた民間教育団体「教育の世紀社」とその経営する東京の「池袋児童の村」小学校関係者(志垣寛、野村芳兵衛、上田庄三郎、峰地光重、小林かねよ等)が主に担当した。初期の定価は五銭、発行部数は創刊の年の大正一四年には既に全学年合計で三〇万部に達し、翌一五年二月には四〇万部を超える勢であったが、最盛期の頃の発行部数の詳細は不明である。購読者の子どもや教師たちは、学校で使う場合はこれを副読本として活用した。子ども雑誌は通常五〇銭前後という時代だったから十分の一というその安価は、児童文化と「書く生活」の裾野を、より広い層の子どもにまで広げる役目を果たすことになる。



■一九三〇(昭和五)年九月、文園社争議を経て、『鑑賞文選』は『綴方讀本』と改題され、郷土社刊となった。郷土社社主は、『鑑賞文選』時代から同誌の編集実務の中心にいた生活綴方の始祖小砂丘忠義(一八九七〜一九三七)である。本誌は、ここに、名実ともに生活綴方のゆりかごとなることになった。

■『綴方讀本』の方も、創刊当初は、『鑑賞文選』時代と同様高等科を含む学年別八冊の月刊で出されており、今井誉次郎など編集部員も数名いた。しかし、転換期に特有の民衆運動の波がひき、売れ行き不振となると、小砂丘一人が独力で編集するものになっていった。そして月八冊という体裁の維持は困難になり、労苦が重なって健康を損ない、次第に欠号が増えていくことになる。

■昭和九年〜十二年の冊子は散逸しほとんどが欠号だが、それを除きほぼ全巻を揃えているのは、今日知られている限り小砂丘文庫所蔵の一セットのみである。揃いが多いのは、この雑誌が、そのときどきの時点での子ども読みのもの、つまり消耗品として扱われてきたことによるためと思われる。今回の復刻は、小砂丘忠義の私本を集めるこの小砂丘文庫所蔵分を主に、公共図書館、個人所蔵分等を加えておこなわれる。

■両誌に収められている一九二〇〜三〇年代の全国の子どもたちの作文、詩、そして有名、無名の教師たちの評文、新童話、評論類は、両誌の主筆者たちの思想的立場を反映して、同時代の地方社会を生きる子ども、教師、親たちの生き様を、素朴なごとばで、ありのままにつたえるものになっている。両誌は、そういう意味において明治国家の集権的な文明化政策の後をうけて、日本で「社会」らしいものが漸く自立への道を自らの深部において歩みはじめる時代の社会史、子ども史、家族史、そして教育史にとつての根本史料をなすものと言えよう。また、同時代史の作家、童話・童謡作家の子どものための作品の寄稿先だった雑誌『赤い鳥』休刊中(一九二九・四〜三〇・一二)も続刊されていた点を考えると、児童文学史の欠落をうめる史料の意味合いもつことになる。その復刻がながく待ち望まれてきたゆえんである。

『鑑賞文選』『綴方讀本』の復刻の意義

琉球大学教授 梶村光郎 (かじむら みつろう)

『鑑賞文選』は、文園社(社主清藤幸七郎)から大正一四(一九二五)年六月に発行され、昭和五(一九三〇)年九月に『綴方讀本』と改題して、昭和一二(一九三七)年頃まで郷土社(社主小砂丘忠義)から発行された、小学生向けの学年別学習雑誌である。尋常科四、五、六年、高等科用の四冊、菊判一六頁(高等科のみ四〇頁)だて、各冊一部五錢(高等科のみ一〇錢)の状態から出発。翌年には尋常一年から高等科二年まで揃い、頁数も尋常三年用以上を三二頁に増加。発行部数も四〇万を突破した。

その内容は、童話、童謡、文話、科学的な読物、漫画、全国から寄せられた綴方(作文)、児童詩等で構成されていた。特に綴方と児童詩には力を入れ、国内だけでなく樺太、台湾、朝鮮、満州からの投稿作品も掲載されている。投稿作品は、各道府県植民地名、町村名、学校名、作者名が付され、当時の子ども達の生活、綴方教育(運動)の実態などを知る上で格好の資料である。綴方教育雑誌『綴方生活』が昭和四(一九二九)年一〇月に創刊されると、『鑑賞文選』はこの雑誌とともに生活綴方運動の一翼をいっそう担っていくが、その実態の解明は不十分であり、その解明が求められている。

またプロの作家の童話や童謡も数多く掲載されている。作家研究の面や児童文学の歴史の面で『鑑賞文選』が果たした役割も、手つかずの状態である。さらに、子どもものの綴方・児童詩は、言語教育(標準語教育を含む)・言語表現の教育の面からだけではなく、子どもが作り出した児童文化の歴史という面からの検討も必要である。また戦前・戦後の民間教育運動の連続性という問題もある。以上のようなことを検討していく場合、『鑑賞文選』(改題『綴方讀本』)は第一級の第一次資料であり、この雑誌の復刻の意義の多くもそこにあると言えよう。



昭和三年六月号
表紙画||竹久夢二



昭和三年六月号
表紙画||刈谷深庵



昭和四年三月号



昭和四年一〇月号

子どもたち固有の言葉と世界を開くために

國學院大学名誉教授 竹内常一 (たけうち つねかず)

大正期から昭和初期にかけて、子どもの文章の掲載を目的とした雑誌が二種類あった。ひとつは『赤い鳥』であり、いまひとつは本シリーズの『鑑賞文選』『綴方讀本』である。

この二つの雑誌はいずれも子どもの声と言葉を公共空間に送るものであったが、前者はすでに復刻され、容易に読むことができるのにならして、後者は長い間その全貌を見ることがなかった。それが、いま、中内敏夫監修、緑蔭書房刊という形でその全貌を現すことになった。

これによって私たちは『赤い鳥』系の子どもの言葉と異なる、いまひとつの生活綴方系の子ども達の言葉を手にとってみることが出来る。そればかりか、これによって、生活綴方の現場で子どもたちがどのようにして自分たちの言葉を紡ぎだし、どのようにして自分たちの生活世界を表現・構築するようになったかを検討できるようになったことは嬉しいかぎりである。

戦争前後のなかで子どもたち固有の言葉と世界をつくりだすために苦闘した本誌の復刻は、「死ぬ」とか「死ぬ」とか「殺す」とかという言葉しかいえない今の子どもたちの言葉と世界を切り拓くために多くの示唆を与えるだろう。

この奇跡の復刻が生かされんことを

中央大学名誉教授 中野 光 (なかの あきら)

戦間期日本の教育を研究するものにとって『鑑賞文選』『綴方讀本』は不可欠に重要な資料であることはわかっていた。私が当時の教育(運動)の担い手であった方々に会って、聴き取りをした経験からしてもそう思われた。また、一九三六(昭和一一)年に小学校に入学した私の受けた教育を想いおこしても綴方の比重は重かった。ひよっとしたら、教師だった私の父母も、私の担任だった教師も綴方教育運動の系譜の上にあったのかも知れない、と思うことがしばしばあった。しかし、そのことを現物に即して確かめるすべはなかった。

ところが、復刻ブームが去ったといわれる今、多くの人にとっての幻の資料が中内さんと緑蔭書房の力によって出版されるとのこと、嬉しいかぎりである。これは、中内さんが生活綴方教育・小砂丘忠義研究を長年積みかさねてこられたその貴重な延長上に実現されたことで、改めて深い敬意を感じている。

この事業は、日本の教育史研究を実践の深い次元で検証することにつながっていくにちがいない。さらに、先人の歴史的営為を顧みることなく推し進められている上すべりの「改革」動向を根底から問い直すうえで生かされることを心から願っている。



昭和六年一月号



昭和五年一月号



推薦します

私たち市民の存在感を刺戟する貴重な役割を果たすことを期待する

東京大学名誉教授 大田 堯 (おおた たかし)

『鑑賞文選』『綴方讀本』は、日本の「民間教育」生活綴方運動の源流に位置づく。戦前の日本社会では、学校教育を通じて、教育勅語の求める皇国(天皇の国)臣民の育成が厳格に行なわれてきた。教育というより教化であり、国家権力による人格の画一化がめざされた。

けれども大正期になると、国際的な潮流にも促され、明治の臣民像に漸くほころびが出てくる。都市文化を中心に、市民としての生活感覚が芽生え、それが逆に農村の生活問題を浮き彫りにしてくる。子どもの文化の登場も、大正文化の特徴の一つだが、一方に文芸的な『赤い鳥』の発刊の後、『鑑賞文選』『綴方讀本』はその影の側面として農村系のリアリズムによる子どもの生活の表白への着目が見られる。一人ひとりちがう子どもの生活表現を励まし、その子その子の可能性を信じて、それにか、わって応答し、編集する小砂丘忠義の存在は、さわ立っている。

それが、毎日、社会の矛盾を背負ってくる子どもたちと対面する文学好きな教師たちの心の琴線にふれ、発展して『綴方生活』へと、リアリズム教育思想を、運動として結晶させるに至る。

『鑑賞文選』『綴方讀本』が出て幾星霜、いま私たちは生活の渦の中にいて、その生活がみえにくい。いわば自己行方不明の中におかれている。『鑑賞文選』『綴方讀本』の復刻が、私たち市民の存在感―自我―を刺戟する貴重な役割を果たすことを、期待したい。

作文・綴方教育実践史研究の新たな成果を期待する

広島大学名誉教授・日本国語教育学会顧問 野地潤家 (のじ じゅんや)

去る四月中旬、思いがけない朗報が入りました。それは、本年10月から、かつて学年別(尋常科六冊、高等科一冊)児童向け全国誌として、大正末期から現存する最終号の昭和10(一九三三)年にいたる一二年間発行された『鑑賞文選』(後に『綴方讀本』に改題、本誌の親雑誌は『綴方生活』でした)が緑蔭書房により復刻刊行されるというしらせでした。

この『鑑賞文選』復刻は、全一六巻・別巻一から成り、総頁は二万二千頁を数えます。別巻には、解説(梶村光郎・平岡さつき・上笙一郎の三氏ご担当)、総目次、児童作品の道府県植民地別目録、地域別・年度別児童投稿作品入選数一覧、作家別の作品目録、主要執筆作品目録などが収録されます。復刻刊行に監修者を努められる中内敏夫先生の「監修のことば」には『鑑賞文選』『綴方讀本』両誌の史料性について周到的確に述べられています。

わが国の作文・綴方教育実践史研究は、意欲的に進められ、多くの成果を挙げていますが、このたびの復刻刊行によって、さらに卓抜な研究成果が生み出されると期待されます。奇跡とも思われる刊行企画が完遂され、不朽の役割を果たされるよう祈ってやみません。

現在の教育の課題につながる資料

日本作文の会常任委員長 三上達也 (みかみ たつや)

三十年近くも前、江口季好に連れられ、小砂丘忠義の長女夢さんのお宅を訪ねました。夢さんはもう亡くなっていました。ご主人の谷口氏が快く迎えてくれました。よそにはない『鑑賞文選』『綴方讀本』を写させてもらうのが目的でした。写真屋を同行し一頁一頁接写してもらいました。そこで初めて『鑑賞文選』を読んだのですが、生活を豊かにしてやることを忘れて、自由に思っただまを書けと言っても、表現の指導に没頭しているのみである、など小砂丘忠義の作品評が明快であったことを覚えています。この度、復刻版が出版されることを聞き、児童詩教育の研究にとっても大変貴重な資料だと、歓迎したい気持ちでいっぱいです。

さて、私が所属する日本作文の会は、戦後結成されたのですが、戦前からの生活綴方の歴史と伝統を受け継ぎ活動を進めています。戦前に発行されていた『綴方讀本』には、我が会につながる生活綴方の先輩たちがたくさん関わってきました。小砂丘忠義が編集発行し、初代委員長今井誉次郎も編集に関わり、村山俊太郎が作品を寄せています。常任委員であった野口茂夫が児童詩の選をしていました。子どもの生活を重視し、真実な表現を大切にされたこの雑誌の精神は、現在の私たちの実践と運動に受け継がれてきています。単なる資料としてではなく、現在の教育の課題につながるものとして、この本がたくさん教師・研究者に読まれることを願っています。

『鑑賞文選』『綴方讀本』略年表

大正一四（一九二五）年

六月 『鑑賞文選』創刊（学年別月刊雑誌、児童用読方・綴方雑誌）、発行所文園社（下中弥三郎の出資により創立）、発行人清藤幸七郎、編集主幹志垣寛、編集顧問には、千葉春雄、野村芳兵衛、奥野庄太郎、菊池知勇、峰地光重、下中弥三郎などがいた。

大正一五（一九二六）年

二月 全学年の合計発行部数が四〇万部を超える。一〜六学年各三二頁、定価五銭、高等科用六四頁、定価一〇銭。

昭和二（一九二七）年

小砂丘忠義が大正一五年秋、昭和二年四月にかけ編集体制を整備、次第に実質的な編集権を持つに至る。神田区今小路に移転。

昭和四（一九二九）年

五月 世界経済恐慌が始まる。

一〇月 『鑑賞文選』の親雑誌にあたる教師のための綴方教育雑誌『綴方生活』創刊（全六八冊刊）

昭和五（一九三〇）年

八月 文園社争議（事実上の社主で主幹であった志垣が同社経営を放棄、親会社の平凡社に返上）

九月 小砂丘（社主）が編集・経営同人制で郷土社を組織し、文園社の事業を引き継ぐ。『鑑賞文選』は誌名を『綴方讀本』に改題して刊行。『綴方生活』はそのままの誌名で続刊。神田区錦町に移転。

昭和六（一九三二）年

九月 「満州事変」勃発

一二月 経営の悪化から郷土社の経営同人を解散し、小砂丘の個人経営となり、社屋も彼の自宅に移す。

昭和八（一九三三）年

六月 『新生綴方』を併合して『新生綴方讀本』（後に、『綴方讀本』にもどす）となる。

昭和一二（一九三七）年

七月 日中戦争始まる。

一二月 親雑誌『綴方生活』は編集・発行人の小砂丘の死去にとまない廃刊。『綴方讀本』の最終年月は不明（昭和一〇年五月の尋常四年・通一〇五年号が現存する最終号）



小砂丘忠義



峰地光重



野村芳兵衛



上田庄三郎



志垣 寛



一九三〇（昭和五）年八月、岐阜で開催された「新興綴方講習会」前列左より、今井善次郎、田川貞二、中島菊夫、小砂丘忠義、千葉春雄、野村芳兵衛、門脇英鎮

『鑑賞文選』『綴方讀本』を支えた主な人々
（当時の肩書 *印は郷土社同人 △印は編集顧問 順不同）
小砂丘忠義（生活綴方の創始者 旧SNK協会同人 郷土社社主 『綴方讀本』編集主幹 実名は笹岡*）

下中弥三郎（教育の世紀社同人 平凡社社主）
清藤幸七郎（文園社社主）
志垣 寛（教育の世紀社同人 『鑑賞文選』編集主幹）

上田庄三郎（雲雀ヶ岡児童の村小校長*）
野村芳兵衛（池袋児童の村小訓導*△）
峰地 光重（池袋児童の村小訓導*△）
小林かねよ（池袋児童の村小訓導*△）
池田 種生（初期の編集実務者 日本教員組合啓明会員）

奥野庄太郎（成城小訓導△）
菊池 知勇（慶応幼稚舎訓導△）
千葉 春雄（『教育・国語教育』綴方倶楽部』主宰者△）
門脇 英鎮（詩人 前期の編集実務者△）
立野 道正（創刊からの編集実務者 表紙担当△）
中島 菊夫（旧SNK協会同人 編集挿絵担当*）
今井善次郎（後期の編集実務者 筆名は江馬泰*）
井野川 潔（後期の編集実務者 夫人は早船ちよ*）
田川 貞二（後期の編集協力者 筆名は南砂雄*）
秋田喜三郎（奈良女高師付属小訓導△）
桜井 祐男（御影児童の村小創立者、校長△）
野口援太郎（教育の世紀社同人 池袋児童の村小校長△）

田中豊太郎（東京高師付属小訓導△）
五味 義武（東京女高師付属小訓導△）
佐々木秀一（東京高師付属小主事 本誌顧問）
向山 嘉章（東京市竹早小訓導△）
村山俊太郎（詩作を多数寄稿、日本教育労働者組合山形県支部の参加者）
橋本 憲三（初期の編集者 夫人は高群逸枝）
岡 五郎（改題『新生綴方讀本』の編集主任）
崎村 義郎（郷土社創設時の出資者 土佐自由民権史の継承者・研究者）



昭和四年に移転した文園社（神田一ツ橋通）

